

Title	青木保教授研究業績
Author(s)	
Citation	年報人間科学. 17 p.277-p.281
Issue Date	1996
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12860
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

◇ 名誉教授の業績目録 ◇

青木 保 教授

(昭和十三年十月三十日生まれ)

青木先生は、昭和四十二年三月に東京大学大学院社会学研究科修士課程を修了され、同年四月に東京大学東洋文化研究所助手に採用されました。その後立教大学文学部助教授を経て、昭和五十年十月に大阪大学人間科学部助教授に就任され、昭和五十八年四月からは教授として人類学講座の主任をつとめてられました。平成六年四月以降は国際情報文化学講座教授も兼任し、平成六年七月には大阪大学にて博士号（人間科学）を取得されています。

この間青木先生は、国際交流委員、開放講座運営委員、留学生センター設置準備委員会専門委員などを歴任し、平成四年から二年間は評議会評議委員として本学の運営に大いに尽くしてられました。また学外においても、日本学術会議の研究連絡委員、国際人類学・民族学学会連絡委員、文部省中央教育審議会専門委員などをつとめ、教育活動の発展と教育行政に尽力されています。

人類学講座においては、講座主催の国際シンポジウム「国際化と民族紛争」、「苦悩と文明」、「今日のナショナリズム」や、その他数多くの国際セミナーを精力的に開催してこれ、とくに、グローバルな視野で国際社会が取り組むべき重要な問題を正面からとりあげた国際シンポジウムは、学問領域を越え、広く社会の大きな関心を集めました。これらのシンポジウムによってもたらされた学問的成果と、教育効果ははかり知れません。

青木先生は一九六五年以来、タイやスリ・ランカを中心に仏教化社会の文化人類学的調査研究を行ってこられました。とりわけ、儀礼を中心とする人間の形式的行動とその表現に注目し、儀礼を「象

「徴論」的に分析するアプローチは先駆的なものであり、文化人類学や関連科学における「象徴論」の理論的研究にも大きな影響を与えました。これらの研究をまとめた著書『儀礼の象徴性』で、一九八五年度のサントリー学芸賞を受賞され、その中の一論文「パリッタの意味論的研究」は、英文の論集にも翻訳・掲載されて、すでに人類学的儀礼研究における「古典」として高い評価を受けています。

このほかにも、ナシヨナリズムや日米関係、近代日本の文化、日本の文化政策とそのアジア諸国との関わりなど、先生のご関心は多岐にわたっており、それぞれの研究テーマについて数多くの著書、論文を発表しておられます。中でもアジア諸国で継続的に行ってこられた実態調査研究をもとに、現代の政治紛争、経済摩擦の背後にある「文化の問題」にいち早く着目し、国際関係や他者理解において文化が果たす否定的作用を鋭く指摘した『文化の否定性』、戦後日本の文化的アイデンティティを「日本文化論」の分析を通して明快に描き出した『日本文化論』の変容』は、文化人類学のみならず、広く関連諸科学の研究にも大きな刺激を与えた重要な業績です。後者の著書には平成二年度の吉野作造賞が授与されました。このような先生のご研究は国際的にも高く評価され、ヨーロッパ日本学会で招待講演をなさるなど、多数の国際学会、国際会議でも記念講演やパネリストをつとめてこられました。また、米ハーバード大学客員研究員、タイ国立チュラロンコン大学研究員、仏国立パリ社会科学高等研究所客員教授などに招聘され、研究と講義をされています。

このほか一九七八年から十回にわたって、東南アジア、東アジア、オーストラリアでの研究調査団を組織し、責任者として調査を主宰されるかたわら、学会活動も国内外を問わず積極的に参画され、とくに日本民族学（文化人類学）会においては平成六年四月から二年間、会長をつとめられました。青木先生が会長および大会委員長として開催された研究大会では「文化人類学とアジア」と題する国際シンポジウムが組織され、アジア諸国からの招待参加者が各国における学問状況について相互理解を深めるとともに、今後学会の共同開催など「アジアの人類学」構築を目指して、具体的に活動を展開していく土台を築くなど、学会の国際化にむけて多大な貢献をされました。このほか日本記号学会、比較文明学会、パリリ文化学会、国際アジア伝統医療学会等の理事・評議員をつとめ、またCulture, Medicine, Psychiatry誌の国際編集委員もつとめられています。

青木先生のご研究とご活動は常に、実態調査研究とその経験をふまえた上での、現代の社会問題への深い関心に支えられており、先生が専門的学問領域をこえて果たしてこられた国際的な「文化の相互理解」への貢献と、その影響にはきわめて大きなものがあります。

主要業績

【著書】

『沈黙の文化を訪ねて』日本経済新聞社、昭和五十一年（中公文庫、平成一年）

『タイの僧院にて』中央公論社、昭和五十一年（中公文庫、平成一年）

『文化の翻訳』東京大学出版会、昭和五十三年

『儀礼の象徴性』岩波書店、昭和五十九年

『異文化遊泳』Ⅰ、Ⅱ、新曜社、昭和六十年

『カルチャー、マス・カルチャー』中央公論社、昭和六十年

『境界の時間』岩波書店、昭和六十年

『御岳巡礼』筑摩書房、昭和六十年（講談社学術文庫、平成五年）

『文化の否定性』中央公論社、昭和六十三年

『日本文化論』の変容』中央公論社、平成二年

【共著・編著】

『いま、国家を問う』（共著）大阪書籍、昭和五十九年

『象徴人類学』（編著）至文堂、昭和五十九年

『聖地スリランカ』（共著）日本放送出版協会、昭和六十年

『儀礼—文化と形式的行動』（共編著）東京大学出版会、昭和六十三年

【論文】

『実地調査者の役割をめぐって』『東洋文化』第四十五号、昭和四十三年

『象徴的二元論と構造分析』『理想』第四二六号、昭和四十三年

『基本構造』をめぐって』『構造主義の世界』大光社、昭和四十四年

『千年王国論（第一部）終末とユートピア』『中央公論』、昭和四十五年二月号

『千年王国論（第二部）神話と変革』『中央公論』、昭和四十五年三月

『千年王国論（第二部）神話と変革』『中央公論』、昭和四十五年三月

号

『民衆運動の理解について』『歴史学研究Ⅱ』第三七八号、昭和四十五年

『日常生活を超えるもの—人類学的認識論』『われわれにとってユートピアとは何か』社会思想社、昭和四十六年

『Some remarks on the New religion movements in contemporary Japan』*East Asian Cultural Studies*, vol.XI, No.5, The Center for

East Asian Cultural Studies, Tokyo, 106-112, 1972

『近代』と未開社会』『東大東洋文化研究所紀要』第五十六号、昭和四十七年

『現代日常生活批判（前）』『中央公論』、昭和四十七年五月号

『現代日常生活批判（後）』『中央公論』、昭和四十七年六月号

『ブンと形式—タイ仏教理解のための一試論』『アジア経済』第十五卷第七号、昭和四十九年

『タイ仏教儀礼の分類』『民族学研究』第三十九卷四号、昭和五十年

『文化の翻訳—現代人類学と異文化理解の試み』『思想』、昭和五十年十二月号

『両義性と多元性』『現代思想』、昭和五十一年三月号

『異文化と無礼講』講座『比較文化六』研究社、昭和五十一年

『メタファーの復権』『世界』、昭和五十三年五月号

『文化に就いて真実とは何か』『中央公論』、昭和五十三年八月号

『コロンボの Parisa 儀礼—調査覚書』『年報人間科学』第一号、大阪大学人間科学部、昭和五十五年

『タンブンの儀礼—その方法と儀礼過程の記述』『社会人類学年報』第十

六号、昭和五十五年

『異文化理解の基礎理論』『現象学的社会学』解説、紀伊国屋書店、昭和五十五年

『アメリカ—文明の困惑』『中央公論』、昭和五十五年一月号

『アメリカ—文明の困惑』『中央公論』、昭和五十五年一月号

『アメリカ—文明の困惑』『中央公論』、昭和五十五年一月号

『アメリカ—文明の困惑』『中央公論』、昭和五十五年一月号

『アメリカ—文明の困惑』『中央公論』、昭和五十五年一月号

『アメリカ—文明の困惑』『中央公論』、昭和五十五年一月号

『アメリカ—文明の困惑』『中央公論』、昭和五十五年一月号

『アメリカ—文明の困惑』『中央公論』、昭和五十五年一月号

- 「記号としての鯨」「海」、昭和五十五年八月号
- 「祝祭と第三世界」「世界」、昭和五十五年十月号
- 「文化の翻訳・翻訳の文化」「文学」、昭和五十五年十二月号
- 「境界の時間」叢書『文化の現在』第7巻、岩波書店、昭和五十六年
- 「パフォーマンスと人類学」「記号学研究二」日本記号学会、昭和五十六年
- 「日常の記号、儀礼の記号」山口昌男編『説き語り記号論』、日本ブリタニカ、昭和五十六年
- 「アメリカの夢―喜劇から悲劇へ」『中央公論』、昭和五十六年六月号
- 「文学と民族誌のあいだ」「海」、昭和五十六年七月号
- 「20年代神話」の破壊―社会人類学における1920年代』『思想』、昭和五十六年十一月号
- 「異文化理解をすすめるために―東南アジアでの調査体験をふまえて」『国際理解』第十四号、昭和五十七年
- 「タンブンの話―仏教の信仰実践」梅棹忠夫編『続民族学の旅』講談社、昭和五十七年
- 「儀礼と国家―人類学的考察・試論」『思想』、昭和五十七年十月号
- 「東南アジアにおける文化摩擦の一類型―スリランカの場合を中心に」大林太良編『文化摩擦の一般理論』巖南堂、昭和五十七年
- 「雨の木」と「乳の木」『海』、昭和五十七年十月号
- 「他者」の視点』『中央公論』、昭和五十八年七月号
- 「劇場国家論の可能性」『現代思想』昭和五十九年
- 「東アジアの国家像」『いま、国家を問う』大阪書籍、昭和五十九年
- 「文化の否定性―反相対主義時代に見る」『中央公論』、昭和六十二年十一月号
- 「文明の実験場―東南アジア、オセアニアのナショナリズムと文化多元主義」濱口恵俊編『国際化と情報化』NHKブックス、昭和六十三年
- 年
- 「儀礼の記述」青木保・黒田悦子編『儀礼―文化と形式的行動』東京大学出版会、昭和六十三年
- 「物語」としてのナチズム』『中央公論』、昭和六十三年十月号
- 「戦後日本と『日本文化論』(前)」『中央公論』、平成二年六月号
- 「戦後日本と『日本文化論』(後)」『中央公論』、平成二年七月号
- ‘A semiotic approach to the role of Paritta in the Buddhist Ritual’, in *The Empire of Signs*, A. Eschenbach (ed.), Foundation of Senjotics, John Benjamin Publishing Co., Amsterdam, 269-284, 1991.
- 「儀礼言語の分析―Paritta理解のためのノート」『大阪大学人間科学部紀要』第七巻、平成三年
- 「ローカルとユニヴァーサル」『ローカル・ノレッジ』解説、岩波書店、平成三年
- 「現代社会と宗教―神は心を閉ざす」岩波講座「宗教と科学五」『宗教と社会科学』、平成四年
- Zur Übersetzbarkheit von Kulture, *Sozial Welt*, Sonderband 8, VI / 420, Verlag Otto Schwartz & Co., Göttingen, 49-67, 1992.
- 「文化とナショナリズム―一つの問題提起」『思想』、平成五年一月号
- 「儀礼の象徴論的研究」学位請求論文、大阪大学・博士(人間科学)、平成五年
- 「アジアシレンマ」『フステイオン』、平成五年冬号
- Anthropology and Japan: Attempts at writing culture, *The Japan Foundation Newsletter*, vol. XXII / No. 3, The Japan Foundation, Tokyo, 1-6, 1994.
- 「開発と終末論」『中央公論』、平成七年五月号
- 「異文化理解とコミュニケーション」岩波講座「現代社会学3」、平成七年

「イスタンブールの幻想」『へるめす』第五十三号、平成七年
「コロンボの憂鬱」『へるめす』第五十四号、平成七年
「境界都市香港」『へるめす』第五十五号、平成七年

他に、書評、エッセイ、小品等、多数。